社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2012／４／1　No.59
発行者：社会福祉法人　ミッドナイトミッションのぞみ会
本　部：〒293-0023　千葉県富津市川名1436番地

創立五十周年を迎えて

理事長
木下　宣世

新しい年度の歩みが始まりました。過ぐる一年間の皆様方のお祈りとご支援に心より感謝申し上げます。お蔭様で昨年度私たち望みの門の諸施設は厳しい社会情勢の中ではありますが、神様の導きと皆様のお支えを与えられて、大きな事故もなくそれぞれの役割を担いつゝ歩んでまいりました。

しかし、不完全な私たちでありますから、様々な失敗や至らぬ点もあったかと思います。新年度を迎えるにあたり、それらの点を反省し、新しい意欲をもって出発したいと思いますのでこれからもご指導のほどよろしくお願い致します。

さて、今年度はミッドナイト・ミッションのぞみ会にとって創立五十周年に当たります。来る六月二十日に富津市の公民館を会場にして記念式典を行うこととなりました。

まことに感慨深いものがあります。今から五十年前というと私は大学生でした。当法人にとって最初の施設である「望みの門学園」の当時の姿を想い出します。現在の「新生舎」の敷地に平屋のかわいらしい建物が建っていました。米軍のいわゆる「かまぼこ兵舎」が食堂と作業場として用いられていました。あの半円形の骨組みを屈強な米兵とペアになって息を切らしながらトラックから運び下ろしたことを今でも鮮明に思い浮かべることができます。あの頃、自分が五十年後にこの法人の理事長になっていることなど全く考えることもできませんでした。

また、今から十年前に、かずさアカデミアパークで行われた創立四十周年記念式典のことも昨日のように思い起こします。理事長に就任して間もなく、右も左もわからず、井本義孝常務理事始め、周囲の方々に助け導かれて何とか大役を果たすことができたのです。まことに冷汗ものでした。

あれから十年、私たちの働きはその始めから半世紀を経て今日に至りました。

先人たちの唯神さまだけを頼りとする血を吐くような努力と、国内及びドイツの多くの方々の尊い御助力のお蔭でここまで発展してくることができました。そして何よりも、無から有をもたらす全能の神の導きを思わざるを得ません。

私たちはこれらのことを心から感謝し、深く心に刻まなければならないと思います。それと同時に心機一転、新しい気持ちで新しい出発をしようとしています。

丁度五十周年を祝うかのように六月には上総湊に七十人定員の特別養護老人ホームが完成します。当法人の中で最も大きな施設の誕生です。職員数も大幅に増加します。

創立後五十年経ち、大所帯となった望みの門がどれだけ創立時の精神を忘れずに、新時代を切り拓いて行けるか、まさに正念場を迎えようとしています。

今後も皆様方の温かい御支援と厳しいご鞭撻、そして熱き祈りを賜わるよう心からお願い申し上げます。

過去に感謝し未来を拓く
―創立五十周年感謝会について―

常務理事　井本　義孝

漸く春らしくなってきた。新生舎の横を歩いていると、鶯の美しい鳴き声を聞いた。三月十四日のことであった。

私にとって初啼きを聞いた日であった。大震災から一年、長閑な日和が、被災された人々の思いを少しでも安らかに出来るなら、どんなにいいだろうか。本気でそう思う。

このような時期に本法人は、創立五十周年の記念日を迎える。本年六月二十日（水）午前十一時から富津市富津公民館（座席数約八五〇）にて当法人創立五十周年記念感謝会を挙行することになった。標記の言葉は感謝会の主題である。心して祝いたい。

五十年前は高度成長期であった。敗戦後の混乱から漸く落ち着きを取り戻しつつあった。テレビ、洗濯機、冷蔵庫の三種の神器。大阪の世界万博、新幹線の開通、皇太子殿下の御成婚は社会を明るくした反面、金銭万能、モラルの退廃は急速に進んだように思う。

これより約十年前に来日された若き宣教師たちは新宿を中心に赤線、青線で働く女性達を救済する活動をされていた。まだ敗戦の傷跡がいたるところにあった。朝鮮戦争が終息したころである。国からは一円の支援もない中を、世界キリスト教協議会やドイツの教会を初め、多くの人々の寄付と祈りで、富津に最初の施設、望みの門学園が創立されたと言う。少ない職員と不十分な設備でその運営はどんなに厳しかったことであろう。

光陰矢のごとし、時代は移り低成長を通り過ぎ今やデフレ不況、うわべはデジタル文化全盛の世となった。連日新聞、テレビは年金、介護、医療の話題でもちきりとなり福祉は社会に定着した感がある。それではもう安心と考えてよいであろうか。誰もうなずくものはいない。これからの法人の先駆的役割は何か、この機会に考えたい。

この記念式典は五十年前この地を提供し、今日の基を築かれた創立者を始め先人たちに感謝し、この地に誘致された地元のかたがたに感謝する会である。

過去をないがしろにしてよきものは生まれない。古人曰く温故知新。キリストの教えを信じ無から有を生み出した汗と涙と祈りを、私たちは受け継がなくてはならないであろう。

未来を拓くにはまず今日、今の時しかないと観念したい。よりよい明日のためでなく、今、この瞬間、この連続こそが、結果として寄りよき明日を招き、未来を拓く事を信じる。昔の事、四十三年前ドイツの大学町マールブルクで品のよいお年寄りから八積ヤツミを知っているかと尋ねられたが、答えられなかった。今思えばベテスダホームのことを教えて下されようとされたのであろう。その方はＭＢＫの支援者ではなかったか。今、自分がＭＢＫと関係の深いミッドナイトミッションのぞみ会にいる。本当に不思議な気がする、つくづくと神の摂理を思う。

（実行委員長）

（仮称）特別養護老人ホーム　富士見荘
春の息吹き

開設準備室長　簾　昭博

あれから早半年がたち、畑であった土地に巨大なコンクリート建造物がそびえている。しかし、未だそれは完全ではなく骨組みを装っている。その骨組みを登り、打設して間もないコンクリートの上に立ち視線を西に向けると、落葉により裸となった大木の枝の隙間の向こうに東京湾をはさみ遥か三浦半島に夕陽が沈もうとしている。長雨明けの久しぶりの好天のせいかもしれないが、夕陽が眩しく思えた。そして、その陽照のかすかな変化に春の息吹を感じることができた。

晴天の恵みのもと起工式が執り行われたのは、まだ残暑厳しい九月十三日のことでした。今は、建物を囲んでいる木々も冬の様相で、落葉樹・針葉樹の差が明らかとなっています。冒頭の情景は建設中の（仮称）特別養護老人ホーム望みの門富士見荘三階床レベルからの現在の眺めです。工事は、これから三階壁及び屋上と搭屋部分の配筋・コンクリート打設が進められ、四月初旬には躯体が完成します。また、順次一階から内装工事が始められ、躯体と内装工事が並行して進められていきます。

平成二十四年は、社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会の五十周年という記念すべき年となります。そのような年に特別養護老人ホームが竣工開設できるということ

は、大変光栄なことであります。
同時に、その担う役割は大変重要であり、地域福祉にとって存在意義のある利用価値の高い施設運営を、しっかりと成していく必要があります。
特に新規導入のユニット型のケアサービスが、利用者の自立（自分で物事を行うこと）ならぬ自律（自分で物事を決めること）の実現に繋がるよう取り組みを進めてまいります。
六月には法人の創立五十周年記念感謝会が予定されており、その中で特養の竣工式が挙行される予定となっています。
完成の暁には、ぜひご内覧いただければ幸いです。

東京望みの門　自立援助ホーム　マナの家
『自立UPプロジェクト』に参加して

指導員　長原恵理子

マナの家は、昨年「ITを活用した児童福祉施設での就労支援プロジェクト」（『自立UPプロジェクト』）に参加させて頂きました。このプロジェクトは、日本マイクロソフト社と東京ボランティア・市民活動センターが協働して、児童養護施設及び自立援助ホームで暮らしている就労期前の子供たちに、ITスキル講習を提供することによって、就労の機会を支援するという目的で行われました。実際には、オリジナルに開発されたカリキュラムとテキストにより、各施設の職員をIT講師に養成し、その職員がそれぞれの施設で、子どもたちに三十二時間のIT講習を実施するというものです。これに基づき、参加希望した二十の施設の職員が、マイクロソフト社において、三回に亘るIT講師養成研修を受講しました。マナの家からも四名の職員が受講させて頂きました。素晴らしい環境の下、オリジナル・テキストを用いて、プロの講師からとてもわかりやすく、パソコンスキルや指導法等について教えて頂きました。
プロジェクト参加にあたり、最新ソフト搭載の中古パソコン五台を寄贈して頂き、念願のインターネット（無線ラン）環境も整えて頂き、八月から十二月にかけて八回のITスキル講習を寮生三名退寮生二名の参加で行うことができました。IT講習の日は、マイクロソフト社からボランティア講師が来て下さり、食堂がパソコン教室に早変わりし、職員が一対一で子供たちにつき、パソコンスキルを学ぶことができました。飲食店で働いている退寮生のRちゃんは、今回の受講を機にパソコンを使う仕事に就くことを目指し始めています。
今回、「自立UPプロジェクト」に参加させて頂き、ITスキル習得が必須の社会で就労の困難さを経験している子供たちに、スキル習得のノウハウを職員と共に教えて頂けたことは、とても貴重で有り難いことでした。

婦人保護施設　望みの門学園
心理相談員として

心理相談員　新藤　紀子

心理相談員として早いもので三年が経ちました。常勤の心理職として初めて配属されたので、当初はこの施設でどんなお手伝いができるのか随分悩みました。三年目が終わろうとする今になってようやく自分がここでできること、しなければならないことがわかってきたように思います。
皆さんは「心理」と聞くと何を思いますか。私の持っている臨床心理士という資格では、その働きを次のように規定しています。まず支援を必要としている人がいた場合、その人の能力がどのようなものであるかを観察や検査から知り（「心理査定」）それを他の職員に分かるように伝えて一緒に考えます（「多職種との連携」）。もし治療的な関わりが必要であると判断されればカウンセリング（「心理療法」）を行ったりします。そして常に専門性を磨く努力（「研究活動」）も必要になります。しかし、施設に常勤として生活に入る心理士には使える心理療法の種類も限定され、検査を取る必要は特定の場合を除いてほとんどありません。その点が病院等で働く心理士とは随分異なります。

学園のような生活支援に入る心理士はむしろ利用者の方が安心して暮せるような環境作りを目指し、そのためには利用者の方がどのような不安を持っているか、その不安を解消するためにはどのような環境整備や働きかけが必要であるかなどを考え、必要に応じて他の職員と情報交換しその利用者を取り巻く状況をより利用者が安定するものに変えていく必要があります。今学園ではボンボン手芸を余暇活動支援として行っています。様々な障害を持つ方の中には何も強制されない自由な時間を一人で楽しむことが苦手な方が多くいます。興味を広げたり趣味を持って自分の時間をじっくり楽しめることでストレスが減り、作ったものなどを他の人からほめられたりすることで自尊心も高まり心が安定してきます。もちろん一度や二度の支援ではそのようは変化は起こりません。日々生活に実際に一緒にいて喜びも悲しみも共有できる心理士だからこそ利用者の方にしっかり寄り添うことができるのではないかと思います。

養護老人ホーム　望みの門楽生園

子供とお年寄りの交流

副施設長　小嶋　友子

去る一月十五日に、児童養護施設「野の花の家」の子供たちによる絵本の読み聞かせを園で行いました。

今まで、読み聞かせを行って下さっていた方の都合が悪く、来られなくなり残念に思っていました。そんな時、子供たちが読み聞かせをやって下さる話があり、良い機会なのでお願いをしました。利用者の方で子供が好きな人もいますが、最近は、子供たちが来る事がなかったので楽しみが出来ました。

先方の施設の方と色々話をさせて頂き、「子供たちはお話を聞く事も好きだが、人に読んであげる事も好きなんです。お年寄りと接する事が少ないので良い経験になると思います。」とおっしゃっていました。

当日は、小学三年生から中学一年生の五人の子供たちがそれぞれの絵本を読んでくれました。少し緊張気味でしたがゆっくり読んで下さり、利用者の方々は、映し出された絵を見ながら話を聞けたのでわかり易かったと思います。その後、わずかな時間でしたが、子供達と一緒に歌を歌ったりジャンケンをして楽しみました。利用者の中には、子供を手招きして呼ぶ姿が見られ、子供たちは恥ずかしそうにしている子もいましたが、声かけすると利用者のところに行ってジャンケンをし握手をしていました。

子供達とのふれあいは、利用者にとってとても良い時間となりました。いつもと違う優しい表情で接していて、まるで自分の孫、ひ孫を見ているようで微笑ましく感じました。子供たちにパワーをもらい元気になったような気がしました。

法人内の交流はありますが、他法人の施設の方とはなかったことなので、これを機会に継続して充実したものになるようにしていきたいと思っています。

特別養護老人ホーム　望みの門紫苑荘

利用者の皆様笑顔で過ごしましょう！

介護支援専門員　平野　千里

こんにちは！二十二年四月より介護員として、二十三年五月より介護支援専門員を兼務として特別養護老人ホーム望みの門紫苑荘に勤務しております。

私は同地に生まれ育ちました。まだ外国の方と会う事など珍しかった小学生の頃、グレーの修道服姿の外国の女性を見かける度に

おとぎ話の世界に紛れ込んだようでドキドキしたものでした。

縁ありましてそのシスターゆかりの当施設にお世話になり、偉業を理解する事が出来ました。『福祉の精神を持ち、まず私に出来る事から行いましょう』と気持ちも新たに働く決意をしました。

紫苑荘には六十代から最年長の方は一〇四歳まで共に過ごされています。単調な施設生活にならないよう季節に合わせた各行事、御家族も参加されるお誕生会、ボランティアの方による折り紙クラブと、催し物を工夫し利用者様に楽しんで頂けるよう努めております。

毎日のリハビリ体操、職員のかけ声に合わせ大きな声を出しながら手足を動かしている利用者様、職員を見つめる瞳の奥に真剣さが伺えます。残存機能の違いはありますが、毎日行っているうち動きも大きくなってきました。一緒に声を出しながら、気持ちが重なります。

「気をつけて帰ってよ」と毎日声をかけて下さる方、掲示物から誕生日を知り、当日「お誕生日おめでとう」と声をかけて下さる方、「お風呂が気持ちよかった」と笑顔で話して下さる方、皆様から頂く言葉に気持ちも和みます。

また、面会に来られるご家族様への深い眼差し、普段の生活では見られない一面を感じ、そしてご家族様との深い絆に、胸が熱くなります。

御家族様には及びませんが、利用者様に寄り添い、施設生活を楽しんで頂けるよう職員一同励んでいます。

もうすぐ暖かい春が来ます。利用者の皆様、お散歩に行きましょう。はい、大きく深呼吸、リハビリ体操の成果を活かしましょうね！

老人デイサービス事業　望みの門デイサービスセンター

地域福祉を目指して

介護員　田巻　亮

望みの門デイサービスセンターは平成十三年七月に開所され、間も無く丸十年が経過し、十一年目のスタートを切ろうという新たな節目を迎えようとしています。ここに、日頃よりお支え頂いております全ての方々に感謝させて頂きたいと思います。ありがとうございます。

昨年度のデイサービスは、近年の高齢化の波がそのまま反映される形となり、徐々にではありますが、ご利用者様の平均介護度が上がってきております。そんな中、いつもと変わらずに体操やレクリエーションで大きなかけ声を出しながら参加されているご利用者様の多さに嬉しさを感じております。また昼食等の外出行事はご利用者様のご希望を聞き、なるべく希望に近い内容を提示し実践することが出来ました。

数ある行事の中で今回初めて行った行事は小学生との交流会です。以前から在宅部門のみならず、法人全体でも『地域福祉』という言葉が聞かれていた中でのこの交流会はとても有意義な行事となりました。訪問して下さったのは富津小学校の三年生四十八名と先生方。合唱や折り紙のプレゼント、また子供達が個々にご利用者様を囲んでの楽しい団欒のひと時と、とても穏やかな時間を過ごすことが出来ました。いつも見ている事が多い慰問とは違い、直接子供達に触れたり、話したり、遊んだりする事がとても楽しかったとご意見を頂きました。子供達からも一緒に遊んで楽しかった、私たちの合唱で涙を流した方がいてくれて嬉しかった、おじいちゃんおばあちゃんがいるのは知っていたがどんな事をしているのか知らなかった等の意見も聞かれました。

子供達から純粋な眼差しと活気を貰い、ご利用者様からは深い愛情を子供達に渡す事が出来たとても良い行事でした。

地域福祉は一朝一夕でなり得る物ではありません。ただこの行事はデイサービスが地域に根差す第一歩になった事は間違いありません。今年度も継続してこの交流会は行っていく計画で、更なる発展を目指し職員一同望んでいきたいと思います。

老人居宅介護　望みの門在宅サービスセンター

「望みの門と私」

介護支援専門員　花澤　光洋

はじめまして。昨年十月に望みの門在宅サービスセンターに着任しました花澤です。

のぞみ会に入って一番に最初、驚いた事は様々な施設がたくさんあることでした。福祉の仕事に携わる者として様々な施設がある事は自分にとって色々な勉強ができ刺激になると思いました。たくさんの職員さんや利用者さんたちとの交流ができれば幸いだと思います。

昨年十一月に望みの門かずさの里感謝祭に参加させて頂く事が出来ました。当日はかずさの里の児童と一緒にゲームコーナーを担当し過ごしました。児童のあまりの元気さにはじめは面喰ってしまいましたが、その明るさにしだいにのみ込まれ元気を貰ったような気がします。どんどんと地域住民の子供たちが来て、とても忙しく時間があっという間に過ぎてしまいましたが楽しかった事を記憶しています。こうした時間を過ごせたのものぞみ会にたくさんの施設があり、その地域住民の方たちとしっかりとした交流があるからこそだと思います。

現在、職場では仕事の中で望みの門デイサービス・ホームヘルプサービス・楽生園・紫苑荘の方たちにお世話になっています。ありがとうございます。これからも多くの方たちと携わって多くの事を学んでいきたいと思います。そして色々な経験をしながら福祉の仕事に携わる者として向上したいと願っています。これからも何卒、宜しくお願い致します。

有料老人ホーム　望みの門ハイム

ハイム開設一周年を迎えて

介護員　渡邊　恭伸

望みの門ハイムは二月で開設から一周年を迎える事が出来ました。入居者数も一月に満室となり、十部屋十一名の方が毎日穏やかに過ごされております。これもひとえに、皆様の多大なるご支援によるものと心より感謝いたしております。

一月末には一名の入居者様が身体的理由により退居する事となりましたが、紫苑荘職員の皆様に御協力頂き、緊密な連携が図れた事により、無事紫苑荘へ入居することが出来ました。紫苑荘職員の皆様には厚く御礼申し上げます。「身体的理由等、その他様々な理由によりハイムでの生活が困難になってきた」等々、入居者様御本人の希望が見られた時、安心して介護を受ける事が出来る…。この安心こそが、高齢者が抱えている将来への不安を和らげてくれる唯一の大きな支えとなるものと考えております。

約一ヶ月間、満床では無くなったものの、二月末には新しい方が入居され再び満床となり賑やかさも増してきたハイムですが、夕食後には毎日の様に入居者の皆様が集まられ、談笑されております。最近では、入居者様同士お互いの部屋に行き来して談笑したり、一緒に散歩に出かけたりと、入居者様同士の交流も増えてきております。育った環境や培ってきた生活スタイルなど、それぞれ違っても、お互いに仲良くなり、刺激を受けてお互いに優しさを増し、明るく元気になられている様です。

心豊かな老後を過ごす為には、健康、お金、仲間、生きがいの四つが必要ですが、入居者様のお姿を日々拝見していると、「毎日顔を合わせる気の合う優しい仲間」がいる事が、心豊かな毎日を過ごす為にどれだけ重要であるかがよく解ります。

右も左も解らず、手探りの状態でハイムがスタートしてから一年、入居者の皆様に「ハイムに来て良かった、元気になった」と少しでも感じて頂ける様、今後も尽力して参りたいと考えております。

就労継続支援事業　望みの門新生舎

なんでもない一日

作業指導員　三幣　知子

朝九時、鮮やかな緑色のバスが新生舎の門を入って来ます。我先に走ってくる人、友

達と昨日のテレビの話しをしている人など様々。玄関に「おはようございます。」と元気な声が響き、さあ一日の始まりです。身支度を整え各班に分かれ午前の作業開始。それぞれ任された作業を一生懸命がんばっている姿は頼もしいものがあります。でも中には作業に集中できず職員の声かけが必要な場合も……新生舎は毎日賑やかです。十二時には、ボリュームたっぷりのおいしい昼食が待っています。昼食後はお待ちかねの昼休み。利用者さんも職員も仕事を忘れ屋外ではウォーキングにバドミントン、室内ではあちらこちらにおしゃべりの輪ができ皆自由に過ごします。また、天気が良い日の廊下のソファは絶好の日向ぼっこの場所。いつしか人が集まり大混雑。しかし楽しい時間は短いもので、午後の作業開始十分前のチャイムが鳴りもう一踏ん張り頑張りましょう。

三時になると掃除に帰りの会。もうすぐ一日の終わりです。「さようなら。」「明日もがんばります。」との声に「明日も忙しいよ、休まないで頑張ろうね。」と職員の声。皆いい顔で帰路についていきます。

これが新生舎のなにげない一日の様子です。おそらく明日も同じ日常が続く、それが当たり前と思っていた私達。でも一年前の大地震が千葉で起きていたらどうなっていたことでしょう。大震災から一年、テレビや新聞などでは連日のようにあの時の映像や一年後の現在を報道しています。しかし今だ復興したとは言えない映像には心が痛みます。家も仕事も失った東北の人達にはどれほど長い一年だったことでしょう。毎日が何事もなく過ぎてゆく事が当たり前で一日一日をあまり大切に過ごしてこなかった事に気付かされます。「なんでもない日」が明日も続くよう日々の暮らしに感謝して毎日を送っていきたいと思います。

共同生活介護・援助事業　グレースホーム

「一年を振り返って」

世話人　樋口　千恵

東日本大震災により、第二グレースの利用者の方々が第一グレースホームで二週間の避難生活をおくってから、一年が経過しました。三月十一日は、各地で追悼式典が執り行われていましたが、未だ多くの人たちが困難な状況にあることも映像で映し出されていました。私たち世話人も、利用者の命を預かる者として、いつまでもあの恐い想いを忘れずに、防災についての意識を高めていかなければと、肝に銘じています。

さて、グレースホームのこの一年ですが、グレースホームが開所して以来の入退所が多い年となりました。日頃より高齢化が進んでいる状況をお知らせしてきましたが、活動場面での転倒の危険性が増したり、グレースホームでの生活や日中活動の場への参加に不安を覚えたりと、昼夜を問わない見守りや支援が必要な方達が増えてきています。そうした中、八月、十二月と二名の方が退所され、新たに生活の場所を特別養護老人ホームに移すことになりました。ご自身が希望されたことでもありますが、やはりお別れの時は淋しく、ご本人も見送る利用者の方達も「元気でね」と泣いてしまいます。しかし、今では皆さんそれぞれの生活に慣れたようで、日曜礼拝等で会う機会があると、グレースホーム利用者の方達と笑顔で挨拶を交わし元気な姿を見せてくれています。

また、退所に伴い入所された方も二名おられます。お二人とも四十代で、グレースの平均年齢が若干若くなりました。二人は、すぐに他の利用者の方達と仲良くなり笑顔で過ごされています。時には失敗をしっちゃったり…。そんな時は、厳しい声かけをするときもありますが、「グレースに来て良かった」と言ってもらえる時も多く、世話人としてやり甲斐やうれしさを感じる瞬間でもあります。

泣いたり笑ったり、本当に毎日賑やかなグレースホームです。これからも楽しい生活や、安らぎのある環境を提供できるよう、努力していきたいと思います。

地域活動支援センター　望みの門ヨカデイサービスセンター

利用者主体の支援を目指して

指導員　岩切　栄子

「ノーマライゼーション」と言う言葉は福祉に携わる人ならどなたでも一度は耳にしたことがあると思います。障害を持っていても一般の人たちと均等に当たり前に生活が出来るような社会を目指すという意味でもあります。本人主体が根本にあり私たちの支援には欠かせない概念でもあります。

私たちは普段何をするか、何を食べるか、何を着るか常にいろいろな場面で自己決定をしながら生きています。しかし利用者の支援となると日常業務に負われ、限られた職員配置では安全確保をするのが精一杯で思い通りには進まないのが現状です。その中で今余暇活動として皆で取り組んでいるものの一つに器楽の演奏があります。

以前片づけをしていたらカスタネットが出てきました。触らせてみるとただバンバンバンと叩くだけだった利用者が練習をしてクリスマス会で発表をしたのをきっかけに「またやろう」という流れになってきました。クリスマス会の時は借り物で演奏しましたが、一月中旬楽器を購入して貰いどんな曲を演奏したいか募集しました。「おもちゃのチャチャチャ」「高校三年生」「青い山脈」「上を向いて歩こう」等を希望されどの曲も前奏から後奏まで長い曲ばかりでした。「三カ月かけて一曲を演奏できるようになろう」を目標に練習を始めました。ところがさすが皆がやりたいと言ってきた曲だけあって一月二十日から練習を始めたのが「高校三年生」を皮切りに「おもちゃのチャチャチャ」「青い山脈」と三曲も演奏できるようになり、先日は新しい曲も覚えたいと言ってきています。

毎日午後ラジオ体操が終わるとMさんは視力の弱い仲間のために椅子を用意してくれ、Yさんは皆のために喜んで楽器を運んできてくれます。音楽の力はすごいもので「練習がいやだ」と言う人は一人もいません。わずか二十分足らずですが手や腰を振りリズムをとる人歌いながらスタッフや仲間の演奏する楽器に合わせて練習をする人と様々ですが皆楽しそうに時には真剣に音が一体となった時は誇らしい顔をする時もあります。このことはほんの一例ですが、生活のあらゆる場面で私たちはもっともっと利用者の思いを吸い上げ主体的に意思決定できるよう知恵を出し「ノーマル」な生活を支援していきたいと思います。東日本大震災から一年過ぎました。被災者に心を寄せ一日も早い復興を心よりお祈りいたします。

千葉県中核地域生活支援センター　君津ふくしネット

富津市に移転して再スタートします

センター長　西山　信男

君津ふくしネットは四月より、イオンモール富津店の交差点前に移転をして、相談支援事業を行うことになりましたので報告いたします。一階の明るい事務所になりました。これを機に、より充実した相談支援が出来るよう専心いたす所存です。

平成十六年の十月に木更津駅前のアクア木更津八階にて、千葉県からの委託事業・中核地域生活支援センターを開業し七年半、地域福祉に貢献して参りましたが、アクアビルの事情により八階が閉鎖となり、事業継続が出来なくなりました。残念でなりません。しかし、これまで通り、『誰もが、ありのままに・その人らしく、地域で暮らす事ができる』よう福祉の総合相談支援機能・権利擁護機能・地域総合コーディネート機能を有し、二十四時間三百六十五日体制で、場所を富津市に定め再スタート致します。

どうかこれまで同様、皆様のご支援をいただきまして、地域の福祉事業に貢献したいと考えておりますので、宜しくお願い申し上げます。

君津ふくしネットは、富津市への事務所移転にともない木更津市、袖ケ浦市に対して、これまで同様に情報共有・提供を行い、支援活動を強化します。

また法人所在地の富津市の皆様には、関係機関との連携強化を進めて、これまで以上の支援活動が出来るよう所員一同、気を引き締めて邁進いたします。

木更津駅前から富津のイオンモール前に移転することにより、皆様にご不便をお掛けしないよう心掛けますので、宜しくお願いします。

児童養護施設　望みの門かずさの里

心理士として、生活を思う

指導員（心理士）　鈴木　博貴

「津波からは逃げられたけど、暮らしからは逃げられない」。この言葉は、東日本大震災被災者の言葉であります。物理的な損傷だけでなく、心理的な傷による暮らしにくさが伝わってきます。

震災から一年経つ中で、人々の様々な心の動きが垣間見えています。ただ漠然と取り残されたくないという感情にかられ、買い物に競う人や、人の苦しみ悲しみを受け止めないような募金詐欺など、「まず自分さえ良ければよい」という人々が少なくありませんでした。一方で、「日本を助けよう」と国内のみならず、世界各国からの温かい支援が数多くありました。こうした周囲の動きの中、被災地では、少ない物資を分け合うなど、損得なしで助け合う姿がごく自然にあったと聞きます。震災を機に、人々は『絆』の大切さを改めて考え、身近である『家族』の重さを再確認し、何よりも『家族』を優先する人々が増えたとのことです。

さて、話は、かずさの里での暮らしに移ります。子ども達にも『絆』『家族』に対して、様々な深い思いがあり、幾重にも傷を抱えている子も少なくありません。それは、子ども一人ひとりには、到底抱えきれない程の重みであり、絶えず「心の奥」でもがいています。それゆえ、他者には些細な事だと思えることでも、本人にはとても大切で、こだわりたい気持ちが強く、それが引き金となり、不快感や苦痛を吐き出すことがあるのです。

そのような時、職員は、子どもの感情を理解しようと、一緒に居続けるよう努めます。それは、「この子が落ち着くまでの時間」や「その事があった日は特に居る」等ではなく、「子どもの心の傍に居続ける存在となる」ということを目指すわけです。このような事象を精神分析家のD.W.Winnicottは『抱える環境』と言っています。また、心理臨床実践でも生活場面での介入、つながりは特に注目されています。

最後に、冒頭の言葉に改めて心を傾けます。「避難できて万歳ではない。大きな傷つきからの回復と、これからの生活に向かって、暮らしていかねば…」の被災者の心情を受け止め、新たな心で子ども達にも思い巡らせます。私たちは、子ども達の心の回復と自立に向けた大切な暮らしを支え見守っているのだと自覚するものです。

乳児院　望みの門方舟乳児園

早くおおきくなぁれ

看護師　足立　利江

乳児園では、「見て、育てて、食べて楽しむ」事により、子供たちの豊かな心を育んで行きたいという思いがあり、季節の草花や野菜、食事作りに挑戦しています。

植物を見る事、触れる事、育てる事は「花育」「食育」に繋がります。「花育」とは、花や緑に親しみ・育てる事で、心豊かな子供たちを育んでいこうという活動です。「食育」とは、健康が維持出来るように食についての知識と、食に対する判断力を身につける為の学習等の事と言われています。

野菜作りを始めると、子供たちは園庭へ出ると真っ先に花壇へ向かいます。トマトやナス、ピーマンやキュウリの花や実、葉に触れ形を感じ香りを感じ、そして元気な声で「赤くなったよー食べれる?」「早く大きくなあれ」と楽しそうに声を掛けています。皆で収穫しキュウリにみそをつけて食べたり、ナスカレーにして美味しく食べる事が出来ました。そして、子供たちと植えたチューリップももうすぐ満開です。

また、「食育の日」として子供たちと一緒にお好み焼きパーティーをしたり、ホットケーキ等のおやつ作りをしたり、お弁当にして園庭で食べたりもしています。この事を通して食材や料理が出来上がるまでの過程を大切にし、様々な人によってそれらが作られているという事を知ってもらい、感謝のこころと食物の大切さを伝える事が出来ればと思っています。

今後も、子供たちが「花や緑に触れる事が楽しい」「花を見てきれい」「収穫が楽しみ」といったことをこころから感じる事が出来るように色々な事に挑戦して行きたいと思います。そして、楽しく食事をする事で子供たちの健康な体を作り、健康なこころも育むようにしていきたいと思います。

お願い

現在、法人50周年記念事業の中で、過去の法人機関誌「望みの門」を再編集する作業を進めております。しかし第２号(1976年)から6号(1981年)までが手元になく欠番となっています。

もし、第2号から6号をお持ちの方は法人事務局（☎0439－87－9381）までご連絡ください。

ご連絡の方には謝礼を差し上げます。

編集後記

「梅は咲いたか。桜はまだかいな。」との時季を迎へん。本年の冬将軍は例年より居座り続けたようにある。「桜咲く」との電報が「合格」の通知であった時代も遠く、今やケータイとスマホの時代となり、報連相の様子もデジタルにとって代わられるようになった。現代は正に日進月歩でなく秒進分歩で技術も経済も変化することとなった。この目まぐるしい変化の中で人の営みは昔からから安定を求めてやまない。生活が安心できる社会こそ福祉社会である。

法人創立五十周年を感謝して未来を拓くには何をどうすればよいか。年金五十兆円。医療費三十兆円、福祉二十兆円の世である。社会保障費は国民の安定した生活に不可欠である。法人設立には国外の支援が多くあったという。無から有を生むためにどれ程の祈りが必要であったか。想像を絶しよう。過去の五十年、そしてこれからの五十年、それを結ぶのは職員である。四月一日には新規採用者二十名に辞令が交付される。期待大である。在職者も心機一転新人に負けぬ働きが期待される。新年度は新特養の開設を控え、大幅な組織改編がなされた。障害福祉部が新設されたこと。地域包括サポートセンターが「施設化」されデイ・ホームヘルプ・在宅・ハイム及び介護予防の各センターが在宅支援のために施設化されたことである。各自一層の精進が望まれる新年度である。

（Y・I）